

論文審査の要旨および担当者

愛知学院大学

報告番号	① 乙 第 号	論文提出者名	山田 康平
論文審査 委員氏名	主査	田中 貴信	
	副査	下郷 和雄 松原 達昭	
論文題名	咽頭口部の感覚と嚥下反応の関係について		

インターネットの利用による公表用

(論文審査の要旨)

No.1.....

(2000字以内のこと)

愛知学院大学

日本人の平均寿命は延伸を続け、今や約 83 歳となっている。このうち、日常的に介護を必要とせずに、自立した生活ができる期間を示す健康寿命は、75 歳といわれている。従って、超高齢社会を迎えた我が国においては、救命や延命と並んで、健康寿命を延伸することや、残された時間をいかに意味のある人生として送れるかというような QOL (quality of life) が医療に求められている。要介護高齢者の日常生活における「楽しみ」に関する過去の調査によると、介護の軽度・重度に係わらず、「食事」が第 1 位であると報告されている。すなわち、美味しく、楽しく、そして安全な食生活の営みは、誰にとっても共通した願いであると言える。また一方で、高齢者にとって注意が必要な疾患は、肺炎である。肺炎は、日本人の死因別死亡率の第 3 位を占めており、年齢別にみると、70 歳以上では全肺炎症例のうち実に 70%以上が誤嚥性肺炎であり、90 歳以上ではさらにその比率が上昇する。すなわち、誤嚥性肺炎を予防し、おいしく安全な食生活を提供することは、寿命の延びた我が国の高齢者にとって極めて重要な課題である。このような社会的背景を鑑み、本研究は、摂食・嚥下リハビリテーション分野に新たな知見を与えるべく、健常成人を対象とした実験 1、2 を通して、咽頭口部の感覚と嚥下反射の関係について調査・検討を行ったものである。

実験 1 は、Stage II transport によって咽頭へと移送された食塊を喉頭蓋付近で知覚できるかという点に着眼した研究である。Stage II transport

とは、固形物の咀嚼嚥下時に、咀嚼と併行して、食物の一部が口峽を通過して咽頭口部へと送り込まれる現象である。この現象では、喉頭が開いているときに、咀嚼された食物が嚥下開始まで咽頭口部に集積される。そのため、咀嚼した食物を嚥下前に誤嚥する危険性が常に潜んでいることになる。従って、健常成人が如何にして、Stage II transport によって移送された食塊から気道を護っているのかを解明していく必要がある。そこで著者は、健常成人に、可及的に長時間、食品を咀嚼することを教示して Stage II transport を生じさせ、健常成人がどのように咽頭で移送された食塊を知覚しているのかを、官能評価で得られた結果と嚥下内視鏡所見とを比較検討したものであるが、その結果、以下の知見を得ている。①咽頭へと移送された食塊を、喉頭蓋で正確に知覚することは健常成人であっても容易ではなく、食塊は、咽頭口部の広い範囲（奥舌から喉頭蓋谷までの領域）で、大まかに知覚されているものと推測された。②摂取食品のテクスチャーが、Stage II transport によって移送された食塊の知覚に影響を与えることはなかった。

次に実験 2 は、生体の気道防御機能の 1 つと考えられている咽頭嚥下と呼ばれる嚥下反射を観察したものである。本実験では、3 種類の検査溶液（蒸留水、酸味水、うま味水）を奥舌から喉頭蓋谷の範囲に滴下し、咽頭嚥下の発現様態を観察することで、以下の知見を得たとしている。①液体による咽頭嚥下の誘発は、咽頭口部での液体の存在の知覚ではなく、液体が喉

(論文審査の要旨)

No. 3

(2000字以内のこと)

愛知学院大学

頭蓋を越え咽頭喉頭部（梨状窩や喉頭前庭）に到達することで引き起こされていると考えられた。②ただし、酸味水のように強い刺激を有する液体を咽頭口部に滴下した場合は、この誘発機序には従わず、液体が喉頭蓋を越える前に咽頭嚥下が誘発されることが明らかとなった。

このように、本研究では嚥下反射における咽頭口部の役割を明らかにしている。特に、酸味のような強い刺激を有する液体が、咽頭口部に存在する時に、通常と異なる機序で嚥下反射が誘発されることを明らかにしたことは、摂食・嚥下障害患者でしばし認められる、咽頭残留への対応として、新たなリハビリテーション手技の可能性を示唆するものである。従って本研究は、摂食・嚥下リハビリテーション医学、内科学、歯科補綴学、歯科口腔外科学および関連諸学科に寄与するところが大きく、博士（歯学）の学位授与に値するものと判定した。

平成26年 1月29日